4 飯沼の椀かしでんせつ

平安時代からつたわるでんせつです。春日部市の庄和地区に、大小たくさんの沼がありました。

ある日のこと、源義家というおさむらいが、ながいたびのとちゅうで飯沼というところに立ちよりました。つかれはてて、おなかもすいたので、しょくじのようをしました。ところが、いざたべようというときになって、おわんがないことに気がつきました。

「こまったな。これではせっかくのしょくじもできないぞ。」

そこで、

「どうかおわんを一つかしてください。」

とかいたかみをじんじゃのちかくの沼になげ入れました。するとふしぎなことに水めんにぶくぶくとあわが立っておわんがうき上がってきました。

「これはたすかった。ありがとう。」

つかれていた義家はありがたくしょくじをいただき、ていねいにおれいをいっておわんを沼にかえして、たび立っていきました。

それからというもの、村人たちもおわんがたりなくなると、おねがいをして沼からおわんをかりました。そして、つかいおわるときれいにあらい、おれいをいってそっと沼にかえしていました。

ある日、ひとりのばあさまが、いつものように

「沼のかみさま、きちんとかえしますから、おわんを二つかしてくださいませ。」

と、ねがいをかいたかみを沼になげ入れました。するとみめんがぶくぶくとあわ立ち、ばあさまのねがいどおり、おわんが二つういてきました。

「これはありがたい。」

と、よろこんでおわんをもちかえりました。

ところが、いざつかいおわると、ばあさまは、おわんをかえすのがもったいなくおもえてきました。

「そうだ。一つだけかえして、あと一つはもらってしまおう。」

と、おわんを一つかえさずにじぶんのものにしてしまいました。

つぎの日、ばあさまが目をさますと、あのおわんがどこにもありません。それどころか、いえ中のおわんというおわんが一つのこらずきえていたのでした。

そして、村人が、なんどおねがいしても、おわんがういてくることはもう二どとありませんでした。沼にはおねがいをかいたかみきれが一まいうかんでいるだけでした。